

2026年2月22日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教72「愛の模範」

詩編41：5～10、ヨハネ13：12～20

愛することは汚れを引き受けることだと申しました。相手の汚れも含めて愛するのです。それは決して涼しい顔をしてすることではありません。イエスさまも弟子たちの足を洗われたときに、鼻歌を歌いながらされたとは思えません。12人の足を一人一人洗われる。これは一仕事です。汗を流されながら足を洗われたかもしれません。なりふり構わず、必死になって、汚れでも何でも引き受ける。しかし多くの人たちは自分が汚れることを好みません。親の威厳、先生の威厳が愛することを邪魔します。けれども愛するということは、先生や親であることの立場や威厳など、どうでもよくなる。なりふり構わず愛する、そういう愛し方ができるのです。何よりイエスさまがそうだからです。まことの神さまでありながらも、まことの人となられ、最後は十字架で死んでいくのです。それでは神さまの立場はどうなる。その威厳は保てないのではないか。わたしたちは心配するかもしれません。

そこでイエスさまは言われます。「はっきり言っておく。僕は主人にまさらず、遣わされた者は遣わした者にまさりはしない。このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである」(16～17節)これは主人が僕のように仕えたからと言って、僕が主人にまさることはない。遣わされた者は、遣わした者にまさることはない。つまり神さまの威厳は保たれるということです。そして「そのとおりに実行するなら、幸いである」(17節)とも言われます。上に立つことにこだわり、そこに固執して、何もしないのであれば、何も始まらない。そういう立場や、威厳を捨てて、なりふり構わず相手のために何かをする。そこに幸いがあるという約束です。

この幸いとは何でしょうか。「事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである」(19節)この「事」とはイエスさまの十字架の死と理解することができます。自分たちの主であり師であるお方が十字架で死なれる、でもその時に「わたしはある」ということを信じるようになるということです。「わたしはある」(エゴ・エイミ)という言葉は、ヨハネ福音書で何度も出てくる重要な言葉です。旧約聖書の出エジプト記にモーセの召命の話があります。その中で神さまがモーセに「わたしはある。わたしはあるという者だ」(3：14)と自己紹介をされた。「わたしはある」ということを信じるようになるというのは、イエスさまが十字架で死なれる時に、そこで弟子たちは神さまを知ることになる。イエスさまが本当に神さまであることがわかるということです。神さまがどういうお方なのか。どれほどわたしたちを愛しておられるのか。それが分かるということです。最後のところでも「わたしを受け入れる人は、わたしをお遣わしになった方を受け入れるのである」とあります。「受け入れる」(ラムバノウ)という言葉は、「受け取る」とか「迎える」という意味があります。十字架で死んでいくイエスさまを受け入れる時に、わたしたちは本当の意味で神さまと出会い、神さまを迎えるのだということです。そこに聖書の示す幸いがあるのです。

でもイエスさまはここで厳しい現実をも語られます。「しかし『わたしのパンを食べている者が、わたしに逆らった』という聖書の言葉は実現しなければならない」(18節)これは具体的にはユダの裏切りを予告していますが、それはわたしたちのことでもあります。イエスさまの十字架を受け入れることができない。ひざまずいて人に仕えることが受け入れられない。そういう愛に破れたわたしたちです。しかしイエスさまはそういう者をあえて弟子としてお選びになら

れました。だからこそ、イエスさまはユダの足をも洗われ、ユダのために十字架におかかりになられたのです。そのようにしてわたしたちの愛の破れをイエスさまはご自身の命をもって繕ってくださったのです。その愛を知った時に、わたしたちは本当の意味で神さまが分かる。神さまと出会うのです。

どういう時にわたしたちは神さまと出会うのでしょうか。順調で何の悩みも苦しみもない時でしょうか。うまく物事が進んでいる時でしょうか。そうではないでしょうか。むしろ生きていて苦しい時、悲しい時にこそ、わたしたちはまことの人として十字架で苦しめたまことの神さまと出会うのです。そこに真の幸いがある。聖書が伝える幸いとこの世で言うところの幸いは全然違います。そこを勘違いして、教会に来れば何か幸せになれると思っている。そうではありません。生きていて苦しい時、辛い時に、そこに神さまがおられることがわかる。神さまと出会える。それが、わたしたちの求めている幸いです。

横浜で牧師の勉強会がありました。ある女性の教職がシンポジウムで発題された。その先生は流産を繰り返すという辛いご経験をされました。でもそのご経験の中で先生はイエスさまと出会うのです。こういうことを言われました。「それまでわたしは母の胎というものを赤ちゃんのゆりかごのように、世界で一番安心できる場所としてイメージしていました。しかし激しい流産で母の胎内が決して小さな命にとって完璧な安全地帯でないことを実感した時、主イエスが、死の力が猛威を振るうこの世界に本当に人として入って来てくださったのは、マリアの胎に宿られたその瞬間だったんだ。こんなにも危険な場所にまことの人として主イエスが身を置いてくださったんだということのリアリティが生々しく迫ってきました。主イエスの受肉とまことの人としての誕生のリアリティは、無事に出産した時よりも、この激しくて苦しい流産の時により強く迫ってきたのです」と。わたしたちが躊躇してしまうほどの内容でしたが、先生はあえて勇気を出してそのような話をしてくださいました。

わたしたちはどこに救いを見ているのでしょうか。痛むこと、苦しむことを恐れて、そこにおられる神さまと出会えないならば、それは救いではないでしょう。パウロも述べています。「あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです」(フィリピ1:29) 誰かを愛するために必死になる。誰かのために苦しむ、痛む。その時に、わたしたちは神さまの愛、恵みを知ることができます。その幸いへとわたしたちは招かれています。

天の父よ。どこか冷めたところがあります。自分の心地よさ、快適さばかり求め、誰かのために必死になることを忘れていきます。けれどもそのようなわたしたちのためにイエスさまが愛することの模範を示してくださいました。それゆえにわたしたちも誰かのために仕えることができますように。そこでこそあなたと出会う幸いを知ることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。